座談会

自走できる学習者を育てるために「高3・0学期」からできること

受験生への切り替え時期として重視されている「高3・0学期」。入試制度に変化がある現高2生に、これからの社会を生きるために必要な資質・能力を育むため、学校・学年団はどのような点に留意して、高3・0学期以降の指導を行えばよいのだろうか。学校改革の最前線に立つ管理職とミドルリーダーに話を聞いた。

学校改革や指導改善の目的をいま一度、学校全体で共有する

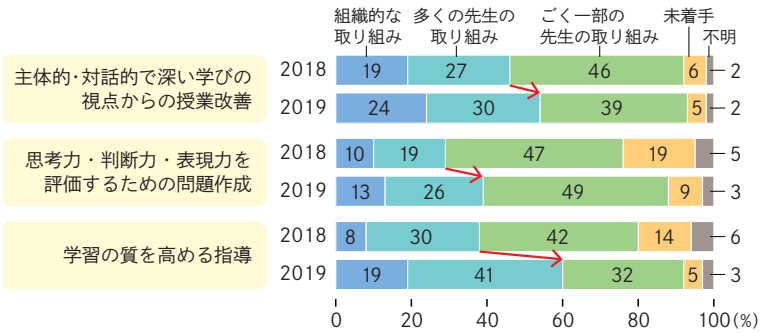
編集部　大学進学を目指す生徒が多い高校では、2年生3学期を「3年生0学期」と位置づけ、受験生への切り替え期としています。現2年生は、思考力・判断力・表現力等がこれまで以上に問われるようになり、入学者選抜全体で多面的・総合的な評価が推進されるなど、大学入試のあり方も変わるため、様々な取り組みを行っている高校が多いと聞きます（図1）。現2年生を率いる学年団は、どのような点に留意して3年生0学期を迎えればよいとお考えでしょうか。

山﨑　多くの高校が、思考力・判断力・表現力等の育成を掲げて教育活動に取り組んでいます。直線的に解答にたどり着く力が求められる時代は終わり、揺さぶられながら最適解に近づいていける生徒を育てていかなければ、Society 5.0の時代を生き抜くことはできないでしょう。主体的に軌道修正しながら、最適解を導き出せる生徒を育てるための学校改革であることを、改めて教師と生徒、保護者が共有することが大切だと考えます。

菅原　受験勉強が目的化していることが、これまでの高校教育の最大の課題だったと思います。何のために学ぶのかを生徒自身が理解しなければ、主体的に学習に向かうことはできず、その先にある大学の学びにも興味・関心を持てないでしょう。3年生0学期は、主体的に学ぶ生徒を育てるために何ができるのかをいま一度考える、よいタイミングだと思います。

岩佐　私たち教師が生徒と確認すべきことは、「なぜ、思考力・判断力・表現力等を身につける必要があるの

図1　資質・能力の育成に向けた取り組み状況



出典／（株）ベネッセコーポレーション教育情報センター「教育・入試改革対応に関する調査」（2019年）。全国の高校へアンケートを実施。有効回答数は約1400校。

茨城県立水海道第一高校
◎2004年度、進学重視型単位制普通科に移行。校訓は、「至誠・剛健・快活」。グローバル社会で活躍する人材育成を目的とした「海高プロジェクト」を実施。
◎設立　1900（明治33）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約280人
◎2019年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、茨城大、筑波大、宇都宮大、東京学芸大などに43人が合格。私立大は、中央大、東京理科大、法政大、明治大、立教大などに延べ586人が合格。
◎URL　http://www.mitsukaido1-h.ibk.ed.jp

茨城県立
水海道（みつかいどう）第一高校
2年次主任
菅原冬樹
すがわら・ふゆき
教職歴23年。同校に赴任して3年目。

か」です。これからの社会を生きる生徒には、どういった資質・能力が必要なのかを、一人ひとりの教師がぶれない指導の軸として持っておかなければいけません。

京都府・京都市立西京高校・附属中学校
副校長
岩佐峰之
いわさ・みねゆき
教職歴30年。同校に赴任して12年目。

京都府・京都市立西京高校・附属中学校
◎校是は、「進取・敢為・独創」。2015年度、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」指定校。
◎設立　1886（明治19）年
◎形態　全日制／エンタープライジング科／共学
◎生徒数　1学年約280人（全日制）
◎2019年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、北海道大、東京大、京都大、大阪大、神戸大などに213人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ671人が合格。
◎URL　http://www.edu.city.kyoto.jp/hp/saikyo

編集部　資質・能力の育成の必要性は、どのようにすれば校内で共通理解ができるのでしょうか。

山﨑　社会が大きく変化していることを、教師や生徒が実感する機会が必要だと思います。本校では、キャリア教育の一環で講演会を行う際、講師に、社会の動きの速さを伝えていただくようお願いしています。社会でどのような資質・能力が求められているのかを、生徒だけではなく、教師も理解することで、旧態依然とした教育では立ちいかないという危機意識を高めたいからです。学校にいるだけでは、社会の変化に気づくことは容易ではありません。

佐賀県立致遠館（ちえんかん）中学・高校
進路指導主事
山﨑俊明
やまさき・としあき
教職歴19年。同校に赴任して9年目。

佐賀県立致遠館中学・高校
◎県立の併設型中高一貫教育校。佐賀藩10代主鍋島直正公の精神が息づく学校。2017年度、文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」指定校（第3期）。
◎設立　1988（昭和63）年
◎形態　全日制／普通科・理数科／共学
◎生徒数　1学年約240人
◎2019年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、名古屋大、京都大、大阪大、九州大、佐賀大、国際教養大などに168人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ340人が合格。
◎URL　http://cms.saga-ed.jp/hp/chienkankoukou/

岩佐　本校では、卒業生が同じような役割を果たしています。卒業生が後輩に、高校での授業の大切さや探究学習の意義を、大学での経験などを踏まえて語ってくれますが、教師にとっても、社会の変化や大学教育の現状を知る重要な機会になっています。

思考力等の育成の振り返りをどのように行うか

編集部　思考力・判断力・表現力等は、社会で生きていく上で必要な資質・能力です。3年生0学期を迎えるにあたり、それらの資質・能力が生徒に身についているかどうか、2年生の12月までの教育活動をどのように振り返るとよいでしょうか。

岩佐　パフォーマンス評価による定点観測で、評価すべきだと考えています。思考力・判断力・表現力等は直線的に向上していくものではありませんから、いろいろな場面でパフォーマンス評価を行いながら、スパイラル的に積み上げていく環境ができているかどうかを、3年生0学期を迎えるまでの間に見直す必要があると思います。

菅原　進路検討会の方法を、従来とは変える必要もあると思います。2年生11月までの模擬試験を振り返り、思考力・判断力・表現力等の評価を見て教育活動の成果を測るのも1つの方法だと思います。模擬試験の結果を見ると、意外な生徒が思考力の高さを評価されていることもあります。外部の指標を利用することで、知識・技能だけではない資質・能力を見取ることができます。

山﨑　思考力・判断力・表現力等は、定性的な評価だけでなく、定量的な評価も試みていくべきでしょう。本校では、課題研究において、ルーブリックを用いた思考力・判断力・表現力等の自己評価、及び他者評価をさせています。それらに加えて、18

年度からは外部のアセスメントを活用して、思考力の育成状況を定量的にも見ています。今後は、外部のアセスメントの結果と大学入試の結果との相関を見ていくつもりですが、そうした評価や分析を何年か継続して積み上げていく中で、自校としての評価軸が定まっていくのではないでしょうか。

「なぜ、その志望なのか」を徹底的に突き詰める

編集部　現2年生は、安全志向の生徒が例年よりも多いと聞きます。希望進路実現のため、どのようなことに配慮して生徒を支援すればよいとお考えでしょうか。

岩佐　最初、生徒は安全志向になりがちです。しかし、生徒が主体的に考えずに、「合格できそう」という理由だけで選んだ大学に安易に入学してしまうと、最悪の場合、退学してしまうこともあります。自分は大学で何がしたいのか、本当に行きたい大学はどこなのかを突き詰めて考えさせることが、これからはますます大切です。

本校では、2年生10月に「受験生宣言」を行ってきましたが、今年度からは、クラスを横断する形で、同じ学部系統を志望する生徒を4～5人のグループにし、「なぜ、この大学・学部なのか」を書いた用紙を読み合う活動を始めました。志望理由が明確でなかった生徒は、自分の夢を熱く語れる人や、大学・学部にこだわりを持つ人がいることに気づき、改めて自分の志望校と向き合うようになります。

この活動では、志望が決まっていない生徒のグループも設けました。そのグループでは、生徒同士が話し合うだけでなく、いろいろな教師がかかわり、自然と個人面談が行われていました。普段接したことのない教師と話をして視野を広げた生徒がいるなど、よい刺激になったと思います。

菅原　現2年生に対しては、入学時から面談などで、「なぜ」を徹底的に問うようにしてきました。進路希望調査、コース選択などで生徒が表明した志望に対して、教師は面談で「なぜ、その大学・学部なのか」を問いかけます。生徒の志望理由は表面的なものも多く、深く問いかけると、自己の内面の矛盾に気づけるようになります。対話を通して、生徒が自分と向き合うようにする指導が必要です。本校の3年生0学期からの指導では、主体性の涵養が大きなテーマになります。面談などで生徒の可能性を広げられるような声かけや助言をできるかが、教師の指導のポイントになると考えています。

山﨑　教師がすべての生徒に対して個別に指導するのは限界がありますから、生徒が自走できるようになることが必要です。そこで、本校では、自分の力で飛び続けることができる「飛行機型人間」の育成を目指して、1年次から指導のサイクルを工夫してきました（**図2**）。自走に向けた意識づけのためには、生徒が自身の状況をメタ認知する面談が有効であり、本校では、面談力向上のための教員研修も行っています。資質・能力を身につけることの必要性を生徒が実感できる面談にすれば、最後の自走の部分が大きく変わるはずです。そこで、2年次の2学期末には、ポートフォリオを使って生徒にリフレクションを行わせ、生徒が自走できる姿勢になっているか確認したいと考えています。

図2　佐賀県立致遠館中学・高校の指導サイクル

◎指導のサイクルを高速回転させる

1年次7月（第1期 Adaptation）
↓ 中学4年生≠高校1年生

1年次8月～2年次8月（第2期 Basis）
↓ 思考（基礎積み）＞判断＞表現　→型を知る

2年次8月～3年次8月（第3期 Challenge）
↓ 思考＜判断（演習・経験）＞表現　→経験する

3年次8月～3年次3月（第4期 Doing）
思考＜判断＜表現（自己表現を含む）　→自走する（飛行機型人間）

＊山﨑先生提供資料を基に編集部で作成。

自律への芽を的確に見取り、成長させる声かけが大切

岩佐　本校では、「自律」という言葉で共通理解していますが、最後は生徒がいかに当事者意識を持って学習に取り組めるかがポイントになると考えています。学習方法についても、「この問題が分かりません」と言って教師を頼る生徒は、自律にはまだ遠い状態です。それに対して、「この解き方はどうですか」などと、質問が具体的になってきた時がチャ

ンスです。自分で考えて課題を見つける行為は自律への第一歩です。教師は、教えすぎず、伴走しながら生徒の悩みを理解することで、主体性を涵養する存在でありたいと思っています。

山﨑　確かに、学力や進路意識が高くなるほど、質問の内容は変わっていきます。志望校選びにしても、この大学に行きたいので調べてみたという動きが出てきたら、志望が明確

になりつつあるということです。そういった生徒は、壁にあたってもぶれずに目標に向かうことができるでしょう。自走の芽を摘み取らず、成長させられるような指導が大切です。

菅原　内発的な動機づけによって主体性が表れるのが理想ですが、生徒の状態によっては、教師の仕かけによる外発的な刺激が必要な場合もあります。ただ、その際も、面談などを通して、自分が何を大切にしているのか、本当にしたいことは何かなど、内面に目を向けさせ、自律的な学びを促す働きかけが欠かせません。主体性を涵養する場づくりは低学年次から必要ですが、3年生0学期からでも遅くはないはずです。自走できる力を備えた時、生徒は私たちの想定を超えて大きく成長し、それぞれの志望を実現するはずです。

教師間での連携が一層求められる

編集部　**現2年生の3年次の指導においては、どのような視点を持っておくとよいでしょうか。**

岩佐　推薦・AO入試の選抜方式も変更・拡大したり、調査書の様式が変わったりするため、生徒の情報を2学年団から3学年団へどのように引き継いでいくか、教師間で連携することが非常に重要になります。

山﨑　本校では、ポートフォリオに生徒の学びや活動を蓄積していますが、それらをどのように調査書や推薦書、志望理由書に反映させるかを校内で検討する必要があると考えています。21年度入試では、入試制度の変更があるため、その対応も含め、時間切れとならないよう、教師も生徒も早めに動くよう心がけたいです。その意味でも、現2年生の3年生0学期は例年以上に重要になると思います。

菅原　現2年生は、11月の修学旅行後に「受験生宣言」を行います。その後は、3か月のスパンで区切って進路指導の計画を立てていきます。また、推薦・AO入試への対応も例年より前倒しで行う予定です。早めに受験希望者を把握し、具体的にどのようにサポートしていくのかを検討する会議も行います。

岩佐　同じ高校の生徒であっても、生徒によって学びや経験は多様になっている今、それを大学入試にどのように結びつけ、一人ひとりの志望をどのように実現するのかを、3年生0学期の段階で教師が話し合うことは、これまで以上に大切になります。一方で、生徒に対して、教師がむやみに危機感をあおらないようにしたいものです。私たち教師が、これまで行ってきた教育活動の本質や目的を確認して、粛々と準備することが重要です。

菅原　入試制度がどのように変わったとしても、しっかりした基礎学力が身についていれば、何も不安に思うことはありません。これまで通り、教師が問題の傾向をしっかり分析し、生徒が落ち着いて対応できるように準備を進めていくつもりです。

山﨑　生徒には、明確な志望を描いて、その実現に向けて全力を尽くしてほしいですし、私たち教師は、それをサポートしていきます。

次ページからは、座談会で、現2年生の3年生0学期以降の指導において考えるべき具体的な視点に挙げられた思考力・判断力・表現力等の育成、面談指導、推薦・AO入試に向けた指導のヒントとなる実践を見ていく。